

# 東アジアの宗教事情を探る

申昌浩 (シン・チャンホウ)

京都精華大学人文学部社会メディア学科講師

Exploring the Religious Situation in East Asia

Shin Changho

Lecturer, Kyoto Seika University



日本には豊かな宗教文化が根づいている。韓国人だからそれが見える。  
日本、韓国、中国。東アジアの社会と宗教の本当の関係を掘り起こしていきたい。

Japan has a rich, deeply rooted religious culture. I can see this precisely because I am Korean.

Here I wish to uncover the true relationship between society and religion in three East Asian countries: Japan, Korea, and China.

私は現在、大学での教育のかたわら、東アジアにおける現代宗教と社会の問題について研究しています。例えばいま中国では北京オリンピックを控え、欧米諸国に表現や宗教の自由が保証されていることを示すために、仏教寺院やカトリック教会などの再建が急ピッチで進められています。この激しい変化が終了すると、戦後の共産党支配の下における中国の宗教の真の姿が消えてしまいます。その点で「いま」がとても大事なのです。

このようなこともあって、数年前に北京周辺の宗教事情を調べ、イエズス会宣教師のマテオ・リッチ (1552~1610) の墓を発見することができました。いろいろ探し回って、ようやく突き止めた場所は、なんと共産党幹部の養成学校の敷地の真ん中でした。中国で没した他の宣教師たちのお墓もいっしょになっていました。

私は韓国の高等学校を卒業してすぐ、日本にやってきました。東京で日本語学校に通いながら大学受験の準備をしていたところ、進路指導の先生から今度、京

都に非常におもしろい大学ができるので受けたらどうか、と紹介されました。そして、いま教員をしている京都精華大学に入学したのです。当時のこは、上野千津子、松本健一、私の担当教員であった小川了先生など、すばらしい教授陣がおられ、本当に新鮮で多くの知的好奇心を満たしてくれました。

修士課程で現代宗教の問題に取り組みはじめました。最大の転機は博士課程の受験で、総研大国際日本研究専攻に合格することができました。そして、師匠である山折哲雄先生につくことができました。日文研は素晴らしい場所で、毎年、海外から世界的な日本学研究者が数十人は来られてセミナーや講演をされます。私はほとんど欠かさず出席しました。学問のおもしろさに引き込まれていったのです。

学位論文は、「韓国的ナショナリズム形成における宗教と政治」です。主な内容は、韓国における近代宗教の成立と日本のかかわりです。

私自身がずっと不思議に思っていたことは、韓国ではクリスマスが公休日であることです。いまはたくさんのキリスト教信者がいますが、この公休日制定された1949年5月には、人口の4%以下でしかありませんでした。植民地から解放後の建国まもない時期に、なぜクリスマスが公休日になったのか。

韓国の国会図書館に出かけて、丹念に官報を調べはじめました。当時の文書は

酸性紙なのか、かなりボロボロ。ページをめくっていくと、机に紙の切れた粉がたまっていました。それはともかく、わかってきたのは、当時の韓国政府の人たちの多くは、日本の植民地時代にアメリカに逃れていた留学生が多く、彼らの実に40%がクリスチャンだったことです。クリスマスが公休日になった理由は、これと無関係ではないと確信しました。

私の学問の方法はすべて日本で教えられ磨かれたものです。でも私は韓国人だから、まわりの要望もあって研究対象が韓国や中国になるというわけです。そんな私からすると、日本の宗教事情もある意味ではっきりと見える面があります。

日本の宗教環境は、外国と違うようです。朝日が昇る前、霧がかかった街角でおばあさんが毎日お地藏様にお花やお水をおそなえする。ビルを立てるのにも儀式をする。こうした習慣について、おそらく大多数の日本人は宗教的な行為とは思っていません。でも、決してそうではない。日本には潜在化された豊かな宗教文化が根づいているように思うのです。

韓国で人文系の博士号を取得した人々の就職率はかなり低いと陣取り合戦のような面もあるようです。そうした中で、高学歴の若い人が就職できず自殺したというニュースを聞いた母は、日本できちんと就職して教育・研究している私のことを「よくやっている」と喜んでくれています。



北京にあるカトリック教会